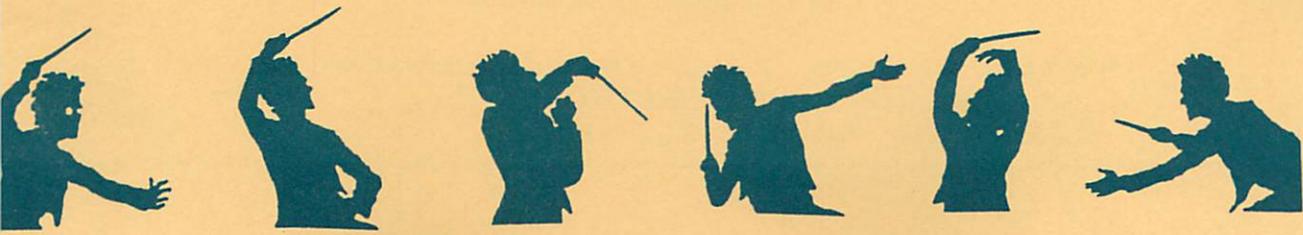




Gustav Mahler : Symphonie Nr. 5

VIII. Konzert 10. Dezember 2000

Philomusica Orchester Kyoto



京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田 之宏

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、しかも楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第8回目となりました。

今回20世紀最後の記念すべき演奏会は、指揮者に金子建志氏をお迎えし、先生方のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、本日ここに魅力あふれる曲の数々を披露してくれるものと期待致しております。皆様にはその努力の結実を演奏の中にお聴きいただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、京都フィロムジカ管弦楽団の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、21世紀に向けて定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡 武志

「自分たちが演奏したい曲を演奏する」。これはアマチュアオーケストラにとってごく普通のことですが、実は容易なことではありません。団員から選曲会議に提出された希望曲のなかには、技術的に困難な曲や編成に無理があるもの、楽譜が入手困難なものなどがあります。

しかしながらフィロムジカでは決して演奏しやすい無難な曲を選びません。困難があることを承知の上で、自分たちが一番やりたい曲を団員投票で決めています。みんなで決めた曲だからみんなで協力しあって演奏会を成功させようという気持ちが全員にあり、このことが「自分たちが演奏したい曲を演奏する」ということの実現につながっていきます。

きょう演奏するマーラー第5交響曲もみんなで決めました。わたしたちのこの熱意が本日ご来場のみなさまに伝わることを願っています。

京都フィロムジカ管弦楽団 第8回定期演奏会

2000年12月10日(日) 2:00開演 京都コンサートホール大ホール

指揮：金子 建志

PROGRAMM

別宮 貞雄 / 「祝典序曲」

BEKKU, Sadao / Celebration Prelude

— 休憩 —

グスタフ・マーラー / 交響曲第5番嬰ハ短調

Gustav MAHLER / Symphonie Nr.5 cis moll

I : 1.Trauermarsch. 2.Stürmisch bewegt, mit größter Vehemenz

II : 3.Scherzo

III : 4.Adagietto. 5.Rondo-Finale.

※携帯電話、ポケットベル、アラーム付き腕時計などの電源はお切り下さい。

また、客席でのご飲食・喫煙はご遠慮下さい。

※写真撮影、録音、録画はお断り申し上げます。

指揮 / ●金子建志



1948年3月8日、千葉県富津市生まれ。70年3月、東京芸術大学音楽部楽理科卒。音楽理論を柴田南雄氏に、指揮法を高階正光氏に師事。芸大在学中より、母校の千葉高校管弦楽団、千葉大学管弦楽団他の指導を皮切りに、市川交響楽団、世田谷交響楽団、千葉フォルハーモニー管弦楽団、19世紀オーケストラ、アンサンブル「花火」等のオーケストラの指揮者を歴任。専門は古典派から近現代の交響曲・管弦楽曲の資料比較を中心とした研究と、

その実践としての指揮活動。NHK・FMのクラシック番組の解説、朝日新聞「試聴室」、レコード芸術、音楽現代のCD評等を担当。著書に音楽之友社「こだわり派のための名曲徹底分析」シリーズの「ブルックナーの交響曲」「マーラーの交響曲」「ベートーヴェンの〈第9〉」「交響曲の名曲I」、立風書房「CD200シリーズ」の「オーケストラの秘密」等がある。尊敬する指揮者はクナッパーツブッシュ、フルトヴェングラー、ムラヴィンスキー、バーンスタイン、チェリビダッケ、C.クライバー。現在、静岡の常葉学園短期大学教授。

Thankyou Print Thankyou Print Thankyou Print

- 印刷物のことならお気軽にご相談下さい
- 見積のみでもOKです
- 親切・丁寧・安心

印刷

三究プリント

〒621-0815 亀岡市古世町3丁目9-6
TEL (0771) 23-7339
FAX (0771) 24-7945

Thankyou Print Thankyou Print Thankyou Print

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作

イチイヒロキ Violin Workshop

ヴァイオリニスト&製作家として、イタリア生活9年の経験が、あなたの演奏をお手伝いします。弦3割引、現柱、駒、糸巻きなど軽微な調整はその場で無料にてしております。お気軽にお越しください。

- ◆ 出町店 〒602-0825 京都市上京区寺町通今出川上ル表町31
- ◆ Tel: 075-251-0724 携帯電話: 090-3628-0863
- ◆ e-mail: hiroki@violin-workshop.com http://www.violin-workshop.com



世界の銘器をあなたのもとへ...
あなたのパートナー選びは
ドルチェ楽器がお手伝いいたします。



音楽器専門店 株式会社ドルチェ楽器
〒530-0013 大阪市北区茶屋町1-1 共済梅田ビル2・3F
tel 06-6377-1117 fax 06-6377-1233
営業時間: 10:30~19:30 定休日: 毎週木曜日
インターネットホームページ <http://www.dolce.co.jp>

Violin Shop

VIOLIN VIOLA CELLO & BOW 販売・製作・修理・調整

渡辺弦楽器工房

京都市中京区高倉丸上ル福屋町728-4 〒604 ☎075-211-0116
西宮市大井出町7-23 〒662 ☎0793-70-2005
FAX 0793-70-2009

今回の演奏会に関して

●私は仕事の関係もあってコンサートに出かけることが多いが、意外に顔を合わせる機会が少ないのが作曲家である。もちろん現代曲や初演の新作が並んだような会は別で、メータ指揮のイスラエル・フィルの来日公演といった一般向きのコンサートで見かけるような常連的な顔ぶれは皆無になる代わりに、普段あまり見かけない作曲家諸先生と、その弟子筋がロビーで談笑するということになる。

そうした中で〈祝典序曲〉の作曲家、別宮氏は、作曲家でありながら両方のタイプのコンサートによく足を運んでいる珍しい存在なので、直接の面識はないものの、いつの間にやら顔だけは覚えてしまった。

京都フィロムジカの練習が既に始まっていた10月のある日、トリフォニー・ホールの新日本フィルの定期で、たまたま別宮氏と隣の席になった。そこで今回のチラシを見せたところ「〈祝典序曲〉となっているけど、実は、たまたま〈交響曲第3番〉を書いている時に、NHKから祝典曲の委嘱があったのですよ。そこで第1楽章を、それに充てることできるんじゃないかと思ってね」と裏話を聞くことができた。

こうした事情で第1楽章だけが〈祝典序曲〉として初演された後、全3楽章の交響曲として完成されている。マーラーは交響詩〈葬礼〉を第1楽章とする形で残りの楽章を膨らませ、全5楽章から成る〈交響曲第2番・復活〉を完成させた。前後関係は逆になるとはいえ、この別宮氏の場合は似た成立事情なのである。

お聴きのように、前衛を嫌って独自の道を歩んだ人らしい、非常にロマンティックな分かり易い曲想で、交響曲としての表題は〈春〉。循環主題的に繰り返される冒頭のファンファーレ主題は、いかにも祝典的だが、第2主題は鳥の囀りを連想させずにはおかない。流れるような曲想が尻上がりに加速してゆく構造はシベリウスやマーラーを思わせる。主題の論理的な構成や、曲全体の雰囲気からすると、やはり交響曲〈春〉の一部として聴くべき曲なのかも知れない。

●マーラーの〈5番〉は、19才年下の美貌の才媛アルマ・シントラーとの結婚を背景に書かれた曲ということもあって、私小説的な側面から講釈されることが多い。その鍵を握るのが、この曲の代名詞のように親しまれている第4楽章「アダージェット」。

弟子達の中で最もマーラーの信頼を得ていたメンゲルベルグは、指揮用に使うスコアに、その曲の解釈に関する事柄を厳密に書き込むのを常としていた。しかも、同じ曲をマーラーが振った時は、どう指揮したか、練習の際にどんな注意を与えたかといった事を、自身の考えとは区別し易いように、インクの色を変えて書き分けるといった徹底ぶりだった。それは自分が振るための確認の徹底という目的もあるが、マーラーの〈4番〉を同じ日に2人で1度ずつ振るといった経験を含めて、大作曲家の身近にいた同時代人しか知りえない演奏現場の歴史的な証言者としての重要性を認識し、後世の人々にマーラーの解釈を具体的に伝える伝道者的な責任を、はっきりと自覚していたからに他ならない。

メンゲルベルグが指揮に用いた〈5番〉のスコアの第4楽章の冒頭ページには「このアダージェットはアルマへの愛の宣言。言葉を全く添えずに、この曲の手書きの楽譜を送ったのだ。アルマは直ぐにその意味を理解し『是非いらして!』と返事を書いた。(これは兩人から聞いた話である)」と記されている。

更に興味深いのは、この「アダージェット」にはマーラー自身による自筆スコアと、それを清書し

譜例①a
(マーラー自身
の自筆スコア)

たアルマによる浄書スコアの2つの筆写譜が残されていること。しかも、その2つの筆写スコア、始まって直ぐの主題の旋律線に違いがあるのだ。マーラー自身による自筆スコアが① a のように「ファーソーラ」となっているのに対し、アルマによる浄書スコア① b は「ファーシーラ」、つまり、我々が今日聴く旋律線に直されているのである。しかも① b をよく見ると、一旦「ファーソーラ」と書いた後、ソを消してシに直したことが明らかになるのだ（両稿の譜例の矢印部分を参照）。

スペースが無いので譜例は省略するが、この冒頭の形が再現される75小節は更に興味深い。マーラー自身による自筆スコアが、提示部とは逆に① b と同じ「ファーシーラ」となっているのに対し、アルマによる浄書スコアは、① a と同じ「ファーソーラ」となっているのだ。再現部の場合も（内容は正反対だが）アルマが一旦「ファーシーラ」と書いた後、シを消してソに直した痕跡が確認できる。補足すると、始まってすぐ、チェロが主題をリフレインする12小節は、自筆スコア、アルマによる浄書スコア共に「ファーシーラ」で、ここに関しては一貫していることが判明する。整理すると以下のとおりだ。

	第3小節	第12小節	第75小節
マーラー自身による自筆スコア	「ファーソーラ」	「ファーシーラ」	「ファーシーラ」
	↓		↓
アルマによる浄書スコア	「ファーシーラ」	「ファーシーラ」	「ファーソーラ」

御承知のようにアルマは作曲を学んでいたせいもあって、〈5番〉のフィナーレをコラールで結ぶことについて、「ブルックナーみたいね（旧式で、ありきたりという意味）」と批評したことが知られているが、この「ファーソーラ」⇒「ファーシーラ」という変更はアルマが何らかの形で関与していなかったのだろうか？

いずれにせよ、この部分は、提示部と再現部が逆転したアルマによる浄書スコアの形を決定稿とする形で印刷され、そのまま今日に至っているわけだから、マーラー自身も承認済の決定事項として、演奏上は何の問題も生じない。真相は不明だが、色々な意味で興味深い変更ではある。

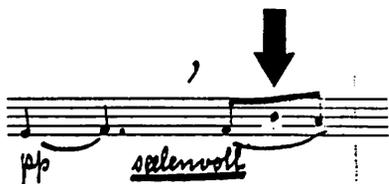
●もう一つ注目されるのはアルマの筆写スコア① b になって、Adagiettoという標題が書き加えられていること。自筆スコアから一貫しているドイツ語によるテンポ指定 Sehr langsam は「非常にゆっくり」であり、それをイタリア語で、そのまま書くなら Molto Adagio となるはず。実際両稿とも、第3小節の a tempo の後にはカッコ付きで、そう書かれているのを確認できる。いっぽう『エツト』という語尾は『マ・ノン・トロポ』等と同様、元の言葉のニュアンスを減じる働きがあるので、Sehr langsam にはそぐわないのだ。しかもアルマの筆写スコア① b の中で、Adagietto の書き込みだけが、典型的な女文字で書かれているのが引っ掛かる。Sehr langsam 等の太い筆跡と較べると、明らかに、意識して細いペンで自体を変えて書くことによって、自分の存在を主張しているかのように見えるのだ。

標語的には矛盾しているが“語感的”には曲想に合っていて、おしゃれな『アダージェット』という表題を提案したのは、或いはアルマだった可能性もあるように思う。もちろん、マーラーが『アダージェット』という言葉を思いついてアルマに口述筆記させたのかも知れないが、その場合は、演奏者に矛盾を感じさせることがないように、Sehr langsam を、何か別の言葉に書き直すのではあるまいか。例えば、Sehr を消すだけだっていいのだから。

アルマの筆写スコアは、様々な面で、恋愛中だった2人しか知りえないプライベートな世界を、それとなく物語っているように見える。

平成12年12月10日 金子建志

譜例①b
(アルマによる
浄書スコア)



矢印部分の拡大
「ソ」を消して「シ」に直した
痕跡が確認できる

譜例はG. キャブランのファクシミリより転載

III.

4. Adagietto.

曲目解説

別宮 貞雄／『祝典序曲』

(交響曲第3番『春』第一楽章「春の訪れ(あつという間に春はやってくる)」より)

別宮は1922年東京生まれ。その作風の特徴は素直に「美しい」と感じられる音楽であることだ。前衛的手法を駆使するあまり聴衆の理解から離れていった現代音楽が氾濫する中で、別宮の保守的な作風はかえって異質に見える。別宮はもともと作曲を趣味にとどめるつもりであり、大学では物理学を専攻、作曲家になる決心をしてパリ音楽院に渡ったのはようやく29歳になってからだ。そうしたアマチュア時代に感じていた音楽への愛情が、別宮にわかりやすい音楽を書かせているのかも知れない。

しかし別宮が単にわかりやすい凡庸な作曲家で終わっていないのは、その美しさの背後に厳しさが潜んでいる点にある。例えば、初期の傑作『二つの祈り』(1956年作曲)は、コラールとフーガを駆使した伝統的な書法を用いて、極めて緊張感の高い精神世界を描いている。また、交響曲第4番『夏 1945』(1991年作曲)は、第2次大戦の敗戦によって得られた解放という重いテーマを選ぶことによって、戦争の惨禍と自由を得た喜びとを同時に描き出すことに成功している。

上記2作品に比べるとこの『祝典序曲』は、『春』と表題がつけられた第3交響曲(1984年作曲)の第一楽章を独立させた作品だけあって、より一層明るい曲である。春スキーから靈感を得て作曲したというこの作品は、冒頭のホルンによるファンファーレとそれに続く第1主題が大地の目覚めを感じさせ、第2主題が雪解けの柔らかさを思わせる。しかし、その背後に潜む自然の厳しさを、別宮はやはり見事に描いている。

流麗だったファンファーレ主題が展開部において、人間を越えた存在を象徴する楽器である4本のトロンボーンによって悪魔的に再現される時、我々は美しさの背後に潜む自然の底知れない巨大さと恐ろしさを意識せざるを得ない。

また、第2主題を彩る鳥のさえずりのような木管は、マーラーの『嘆きの歌』を連想させる。マーラーのこの歌曲は、兄が弟を殺すという空恐ろしいストーリーなのだが、その事件の舞台となった森の情景を美しく描写することによって、人間の愚かで短い生と悠久不変の自然とを見事に対比させている。この『嘆きの歌』からの連想によって、人間の些末な営みを見守り続けている「自然の悠久不変の営み」の存在を思い出すことになるのである。

ベートーベンの田園交響曲、ブラームスの第2交響曲やブルックナー、シベリウスの諸作品の例を出すまでもなく、自然賛美をテーマにした曲が傑作として残っていくためには、自然の表面的な美しさだけでなくその背後に潜む巨大さ・恐ろしさをも描き切る必要がある。別宮はそうした過酷なテーマに、前衛性によって保身することなしに果敢に挑んでいるのである。

我々と同時代の我々が住む同じ土地に、このような偉大な作曲家がいるのだ、ということを知ってもらおう機会になれば幸いです。(曲目推薦者:Tp.遠藤啓輔)

マーラー／交響曲第5番嬰ハ短調

～初めて聞く人のための、マーラー交響曲第5番概説

第1部：第1楽章 「葬送行進曲」 落ち着いた歩調で、厳格に葬列のように
第2楽章 嵐のように激しく、できる限りの激しさをもって

第2部：第3楽章 「スケルツォ」 力強く、速すぎないように

第3部：第4楽章 「アダージェット」 非常にゆっくりと
第5楽章 「ロンドーフィナーレ」

●交響曲第5番の頃のマーラー

グスタフ・マーラー（1860～1911）は、この交響曲を1901年から1902年にかけて作曲しました。その間に、アルマ・シントラーとの恋愛・結婚を経験しています。アルマ自身も作曲を学んでいたため、この第5交響曲は2人のはじめての共同制作ということになるのでしょうか（と言っても、グスタフはアルマが作曲活動をするのを許さなかったのですが）。そのせいか、それまでの4つの交響曲とは少し雰囲気が違うように感じられます。

●交響曲第5番の性格

よくマーラーは「生と死」というテーマに執着した作曲家だと言われていますが（実際、マーラー自身もそう自覚していたようです）、この交響曲はそのテーマにあてはめるとより理解しやすくなります。たとえば、1楽章は表題の通り「葬送」（しかも、ベートーベンの第5交響曲「運命」のモチーフと同じリズムが使いまわされます）、2楽章は死の恐怖をさらに強調するかのよう激しくめまぐるしい曲、3楽章は一転してまるで人間の喜怒哀楽を全部つめこんだような狂気の踊り、4楽章は夢の中に吸い込まれていきそうな（と言っても、眠らないでくださいね）美しい響き、5楽章は生の喜びが爆発したような明るくて壮麗な曲、といった風に。みなさんも、今日の演奏を聞いて自由に想像をめぐらせてみてください。

●オーケストレーション

この曲には、「どこかで聞いたような」旋律が多く使われています。マーラーはわざとそういった旋律を使ったのだとは思いますが、彼の凄いとところは、そのオーケストレーション（管弦楽曲としてまとめあげること）にあります。大袈裟なまでのダイナミクス、激しすぎる音の嵐、とろけるくらいに歌わせるエスプレッシーボ。これでもか、これでもか、といわんばかりです。

ところで、マーラーの楽譜には大量の書き込み・注意書きがマーラー自身の手でほどこされているのですが、この第5交響曲も例外ではありません。最初に書いた表題と標語を見てもわかるように、音楽が始まる前の段階で、既にこれほどまでに指示が細かいのです。特に感情的な4楽章なんて、40小節ほどの間に13ヶ所もの書き込みがあります。さすがですねえ・・・（でも、演奏者泣かせ。）

●聞き所

この第5交響曲、どこが聞き所かという迷ってしまいます。できれば、全部聞いて欲しいところですが、約1時間も集中して聞くと音の洪水におぼれてしまうかもしれませんしね（笑）

とりあえず、各楽章の冒頭はどれも大変意味のあるものになっていますので御注目ください。それらのメロディーは、後々いろいろな箇所に出てきて楽章内・楽章間を密接に関連付けます。特に、1楽章と2楽章、4楽章と5楽章の関係はよく考えて作られています。次は、各楽章の終わりでしょうか。1、2楽章は、静かに、でも解決できないものを残して終わります。3、5楽章（特に5楽章！）は、オーケストラが大爆発して終わります。どちらも、大爆発する事しかマーラーの頭の中にはなかったことでしょう。

あとは、、『陶酔しきって聞く』こと！私はこれを一番お勧めします。

では、良い演奏会になりますように！

(Vn.西村浩輔)

「まったく異なる方向から※」 ～団員が語るマーラー5番

冒頭の兵隊喇叭

トランペット：遠藤 啓輔

「軍楽隊風に」と指示された冒頭のファンファーレは、マーラーの幼児体験に刷り込まれた、故郷ボヘミアに駐留するオーストリア軍の兵隊喇叭である。民族の故郷を持たぬユダヤ人が聞く、生まれ故郷を支配する異国の軍隊のラッパ。根無し草という意味での「ボヘミアン」マーラーの姿がこの短いファンファーレに見事に集約されている。

一方で、このファンファーレをベートーベン第5交響曲の「運命動機」やメンデルスゾーン「結婚行進曲」のパロディーと見なす穿った見方もあるが、そうした憶測を受け容れるだけの素地がマーラーの人生にはある。成功の絶頂期に悲劇的な曲を書き、その悲劇を実際の人生に於いて実現してしまうという彼の不可解な行動。実際このときマーラーは婚約者を得ていたのだが、その結婚が晩年のマーラーを苦悩に陥れる。「結婚行進曲」を引用しながらもそこから暗い葬送音楽を引き出してしまったことにより、未来の辛い運命を自ら決めてしまったかのようなのである。幸福を得ても、それを失う運命の予感に耐えられないために取って替えて幸福を捨ててしまうという悲しいマーラーの性、実体の見えない「幸福」を求めてさまよい歩く寂しい男の姿が見えてくる。

寄る辺ないままに苦悩と狂喜の間を彷徨し、結局それらが緋い交ぜになった狂乱のうちに「幸福とは何か」を見失ってしまうかのような奇妙な第5交響曲。この曲の謎を解く鍵は、実に多重な意味合いを持つこの冒頭の短いファンファーレに既に秘められている。

マーラーの木管

クラリネット：田中 慎一郎

マーラーの木管、というところの「ぎゅるぎゅる」とした高音のユニゾン（同じ旋律を多くの楽器で一度に奏する）が、クラリネット吹きの僕には真っ先に思い出される。許せないことに、やつは本当は僕ら木管楽器をソロ楽器として使うやり方を（シューマンなんかとは違って）よく知っているのにもかかわらず、取って替えてそうした使い方をしてくださったのである。

その使い方も普通ではない。ユニゾン自体はあの偉人チャイコフスキー様や、前回の演奏会のショスタコービッチ野郎もやらせて下さるのだが、この2人がベートーベンに似た「弦対管」みたいな場面で我々を使うのと比べると（まだ聴こえる分まし!）、マーラーの「ぎゅるぎゅる木管」は独立性が高い。唐突に変な旋律を吹いたり、弦楽器や金管楽器と同時にみんなでのわけのわからんことをやったり、なんてことが多すぎる

彼は、一度にいろんな音に見バラバラな旋律やリズムを奏でさせ、それらが音楽を紡ぎ出す、複雑怪奇で魅力的な“Symphony”を作り出そうとした。木管楽器の使われ方にも、マーラーのそんな意志がよくあらわれている。

葬送行進曲としての第1部

チェロ：小野田 税

西洋の宗教的文化的背景を持たない日本人の私にとって、「葬送行進曲」といえば誰かの弔いのための曲という認識になってしまいます。そんな私がこの曲に対してまず抱くのは「誰のための曲なのだろう」という疑問です。

例えば、ベートーヴェンの第三交響曲ならば、『ナポレオン』という具体的な名前が浮かんできますが。マーラーは誰を弔う必要があったのでしょうか？第五交響曲は、マーラーのそれまでの交響曲と比べ『子どもの不思議な角笛』のメロディを使わず純粋な器楽曲として書かれています。そして、この後の第六、第七と続く作品群への転換期の作品ということからも先に挙げた疑問に対する私の解答としては、「それまで（過去）の自分自身を葬った」ということになります。それは未来に対しての希望の裏返しであるのかもしれませんが。

「やがて私の時代が来る」と言ったマーラー。その通り20世紀後半はまさに彼の時代だったと思います。21世紀は誰の時代になるのでしょうか。演奏する、または聴く側の我々は何を求めていくのでしょうか。我々にも過去の自分と訣別したくなるような時が訪れるのかもしれませんが。もしその

ような時が来たとしても、未来への希望まで捨てないようにしたいですね。
あと3週間ー。

「マーラーのポリフォニー・・・？」

クラリネット：武田 勝正

第一級の指揮者でもある彼は、その休暇に、好きな登山をし、また、湖のほとりの世間や街の喧噪から隔絶された静謐な「作曲小屋」で、交響曲作品などの作曲に没頭する。この第5交響曲は、彼の50年間の生涯でも、ウィーン宮廷歌劇場の指揮者として成功し、また、生涯の妻となるアルマと出会うなど、幸福な充実した時期に作曲された。だが、彼独特の、深く沈んだ思索的な叙情性、迸る激情と内面的葛藤の吐露が描かれるが、この作品にも、どこか「悲しみ」の予感が絶えずよぎる。叙情的な主題の伴奏音型には「運命」のリズムが鼓動し、あの「ぎゅるぎゅる」とした木管の高音のユニゾンの響きは心に激痛をもたらし、聴衆の魂を激しく揺さぶる。クラリネット吹きも、必ず、パート譜を見た瞬間、この曲のどこに自分は位置づけられているかを探る。主題の旋律、伴奏、ユニゾン、又は応答・・・などの役割を把握し、音楽作りに参加する訳だが、この作品は、複雑で、色々と忙しい。複旋律の部分や、旋律部分と分散和音音型の伴奏部分などが、弦楽器や金管楽器と幾層にも重なり合い、あっちこっち、気を回さねばならない。更に、3オクターブ飛跳ねたり、高音を強奏したり、実に奔放な、挙句、ベルアップして奏でなさい、という指示までである。しかし、これらが、精緻な交響曲に組み立てられ、マーラー独自の音楽世界を築いている。

「みせかけの明るさ」～第二部・スケルツォ～

ホルン：坂口 裕志

第二部（第三楽章）は、第一部（第一、第二楽章）とは打って変わって、明るく、軽快に始まる。しかし、その明るさはどことなく空虚で、今にも壊れてしまいそうな危うさを感じさせる。第一部の重苦しい雰囲気と、あまりに対照的だからだろうか。弦楽器の8分音符によってその予感は現実味を帯び、一度は平穏と明るさを取り戻すものの、やがてホルンの咆哮によって絶望がすべてを覆う。再び平穏が訪れるが、それは次第に狂乱へと変わってゆく。

第二部は明るさ、平穏、絶望、狂乱の繰り返しである。最後こそ華々しく、力強く終わるものの、それすらも半ばヤケクソのカラ元気のように思える。

第一部の陰鬱さに対し、第二部ではみせかけの明るさを提示する。その上で第三部（第4、第5楽章）を聴いたとき、フィナーレの歓喜に満ちた響きは、どのように聞こえるだろうか。「苦難を乗り越えて喜びに至った」のか。それとも「結局はこの喜びのみせかけ」なのだろうか。

朝の作曲家

ティンパニ：永野 貴子

滅多にないことだが夏の朝、5時に目がさめてしまう。心地よい眠りを中断したものもまた、心地よい目覚めで、私はそれ以上ベッドの中にいるのがもったいなくなる。

日はすでに昇り、夏の朝の涼しさが私の肌を通じて五感を刺激する。「今朝は裏山の散歩にでも行こう」と、がらにもなく思う。朝靄の中、冷たい空気を胸一杯に吸い込み、普段は感じた事がない朝を体験する。道端の草木が濡れている。山鳩やほかの鳥の鳴き声。犬と散歩している人。挨拶を交わす。ひっそりとしたたたずまいの寺院。こんなところにこんな建物があったらだろうか、と少しだけのびっくり。家に帰ってもまだ6時前で、時間のつぶし方を思案する。やらねばならないことはあったらどうか？いや、せっかくのこの時間、早起きによってできたボーナスをせわしく使うことはやめよう。コーヒーを入れながら、私は一枚のCDをとりだし、ステレオに投げ込む。ボリュームはちょっと抑え気味にして。誰かが起きてはいけないから。この朝の時間は、私のものなのだ。誰にも邪魔されることがなく思索にふけり、好きな音楽を聴いて、コーヒーのアロマを楽しもう。さて、今日はなにをしようかな。

弦とハープの、やわらかな、甘い調べが部屋の中に静かに響く。マーラーだ。
「朝の作曲家」にふさわしい朝の音楽。ああ、湖面が見えてきた。

対向配置に関して

第2ヴァイオリン：大八木 文人

対向配置を採用して今までと何が変わるのか。それを一言で表すことは出来ないし、楽器によってもそれは異なる。ここでは一人の2nd Vn.奏者としての勝手な意見を書くにとどめる。

「景色」が変わる・・・具体的に言うならば、聴衆が見渡せる、そして1stVn.を正面から観察することが出来る。この2点に尽きる。

普通の配置では2ndは1stの内側に隠れてしまい、聴衆の目に触れる部分はほんとに少ない。演奏者にとって聴衆より視線が注がれることは非常に重要なことだ。オーケストラの音は単純に聴覚だけで感じることは不可能で、身体中のあらゆる感覚を総動員して初めて感じとられるものだからである。視覚も、音を感じとるための重要な要素のひとつなのだ。そして演奏者は、その視線を自身で感じとることにより緊迫感を持って曲に臨むことが出来るのである。聴衆の目にじかに触れる配置にある2ndVn.は、非常にやりがいを感じて演奏することになる。

また、1stVn.と対向することになり、彼らの、特にコンサートマスターの動きや息遣いに大変敏感になる。彼らの描く、曲に対してのイメージが正面からダイレクトに伝わって来て、こちら側もそのイメージに合わせていくのが大分容易な事となる。

・・・ここまでメリットばかりを強調してあげつらう形になってしまったけれども、これらは実際に対向配置で演奏しながら強く感じることはばかりなのだ。もちろんデメリットも存在しないわけではないが、そんなものを感じさせないような演奏をしたいと思っている。

第4楽章：Adagiette

コンサートマスター：天澤 天二郎

単独で演奏されることの多いこの曲は長いこの交響曲の中にあってもなお、その特殊性を感じることができる。のちに夫人となるアルマ（実際には作曲中に結婚）に送った求婚の曲であるという事実から、この曲は5楽章への序曲、または3、5楽章の間奏曲などではなく、逆にこの交響曲が4楽章をメインにすえて出来上がっているという聴き方も可能ではないだろうか。私の全く個人的な意見であり、なかには反感を持たれる方もあるかわからないが、事実上ドラマは4楽章で終了して、5楽章は曲の長さの割には極めて機械的で楽天的ないわばCODAであり、式のあとの宴（ダンスパーティー？）である。一部に4楽章を思わせる旋律が登場するが、それは余韻に過ぎない。

ところでマスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」をご存知だろうか？私はAdagietteを想うとき、「カヴァレリア・ルスティカーナ」の間奏曲が頭に浮かぶ。マスカーニが天国的と表現されるのに対し、マーラーはかなり現実的ではあるが、曲全体に漂う何とも言えない幸福感（いや、マーラーの場合幸せでないことさえ、幸せであると言い切ってしまうような印象を持つが・・・）に共通性を感じるのは私だけではあるまい。もちろん、そんな演奏は「マーラーではない」と指摘する先生方もいて、すると私の解釈は間違っているのかなと思ってみたりもするが、愛を語る曲にいちやもんをつけるのは、「君の愛は本当の愛ではない！」などといっているのと変わらない。今回はそんな批判を聞けるくらいの演奏をできたらいいと、内心企んでいる。フィロムジカのAdagietteを。

交響曲第5番におけるコラールについて

トロンボーン：宮下 秀行

ベートーヴェン以来、数多くの作曲家が自身の第5交響曲を「苦悩から歓喜へ」といった同じテーマに基づき書いているが、このマーラーの第5番も「運命交響曲」と同じ構成になっている。1楽章から「運命の動機」を思わせるリズムが続き、それがこの2楽章にも頻りに顔を出す。途中勝利のコラールを形成する最初の3音の動機が、賛歌が始まるのが今か今かと思わせぶりに続き、それに打ち勝ったかのように金管楽器による賛歌が2回登場する。がいずれも木管群により打ち消される。2楽章のコラールの特徴は自ら苦悩より導いた勝利への否定。2楽章は再び苦悩の音楽とな

り終わりを迎える。

そして3楽章へ続くが、これは聞き手を裏切るホルンのソロに導かれるどことなく憂いを込めたウィナワルツ風の旋律。このギャップがマーラーの意外性ではある。

さて5楽章には2楽章と同じコラールが今度は決して否定されることなく本当の勝利の賛歌として響いて曲は幕を閉じる。

合計コラールは4回登場するがそのうち3回がニ長調。嬰ハ短調で始まるこの大曲はニ長調で結ばれるが、その最終結論に達しようとした彼の意思の表れなのかはわからない。

最終楽章の明るさは丁度この時期アルマとの結婚を決めた彼の自身への賛歌も含まれているのかも知れない。

マーラー：『交響曲第五番』第五楽章 ～『徒然交響曲』～

オーボエ：中西 充弥

「つれづれなるままに、ひぐらし五線紙にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」

仮に、マーラーがこんな事を言ったと聞かされても、あまり違和感を覚えないのは私だけでしょうか。『徒然草』は言うまでもなく兼好法師の随筆ですが、マーラーの交響曲も音楽で綴られたエッセーと見ることができます。喜怒哀楽、さまざまな感情が、音のパッチワークとして錦を織り成すのです。

それでは、なぜ『徒然草』を取り上げるかという、それはマーラーの音楽との共通点として、まず「無常観」が上げられるからです。兼好は、もちろん僧侶として日々死と向き合っていたのですが、マーラーも、交響曲に「葬送行進曲」を持ち込むように、死をテーマに思索しています。

しかし、ここで私が強調したいのは、両者とも「無常観」だけにとらわれない、実に「人間くさい」面を持ち合わせているということです。

たとえば、『徒然草』の第七十段で、仏道修行の妨げになるからと、「さしたることなくて人のがりゆくは、よからぬことなり。」と言っておきながら、その後で、友と語らうのは楽しいものだとして、「そのこととなきに人の来りて、のどかに物語して帰りぬる、いとよし。」と言っているのがそうです。人里離れて暮らしている「隠者」も、実は淋しがり屋で人恋しく思っているのです。

このような矛盾を抱えた人間のありのままの姿、つまり「人間くささ」がマーラーの音楽にも認められます。楽章ごとの対比を見ても明らかです。

さて、それでは五楽章の話ですが、ここで語られる（はずの）、この交響曲の結論は一体何なののでしょうか？と、ここで再び『徒然草』に戻ってみましょう。『徒然草』の最終段は、兼好が父親に、「教え候ひける仏をば、なにかをしへ候ひける。」という、「ニワトリが先かタマゴが先か」のようなとんち問答をふっかけて困らせたという話ですが、マーラーの五楽章もこの章段に相通じるものがあります。冒頭の『少年の魔法の角笛』の引用に始まり、何やらやけに明るい（うさんくさい）音楽が奏でられたかと思うと、最後には重厚なコラールが鳴り響きます。それでは「神の栄光」か、はたまた「人間賛歌」を高らかに歌い上げるのかと思えば、突如せつやかな音楽が割り込んできて、気が付くと怒涛のうちに曲は終わってしまうのです。

兼好、マーラー共々、我々に最後で肩透かしを食らわせるこのウィットが何とも興味深いのですが、それでは結局彼らが言いたかったことは何なのかと考えますと、それは、ウィットによって茶化された部分にあるのではないのでしょうか。つまり、「人間に対するまなざし」なのです。兼好は、字のごとく人との交わりを絶って暮らす「隠者」であり、マーラーは気難しくて付き合いにくい人として有名であったわけですが、二人とも本当は「人間が大好き」だったのです。ただ照れ屋さんで、ちょっとあまのじゃくで素直にそう言えなかったのです。

※マーラーは「ポリフォニー」について「森の中で、響きのポリフォニーに奇妙に感動し、強い感銘を受けたものだ。そのポリフォニーは、騒音のなかでも、幾千羽の小鳥たちの囀りのなかでも、嵐のうなり声のなかでも、波の音のなかでも、火の燃えさかる音のなかでも、まったく同じように聞こえた。諸主題というものは、まったく異なる方向から、これと同じように出現しなければならないのだ。そしてそれらの主題は、リズムの性格も旋律の性格もまったくちがったものでなければならない。」と語ったと言われる。（船山隆「異邦人マーラー」『ポリフォニー Vol. 1』1987）（構成 Tp:遠藤啓輔）

京都フィロムジカ管弦楽団生い立ちの記

1995. 12

“学生を中心とする、若くアヴァンギャルドなオーケストラ”を夢見た小林香（初代団長）、井上史（初代コンミス）による、京都フィロムジカ管弦楽団創団プロジェクト開始。

1996. 3. 31(日) 京都フィロムジカ管弦楽団創団、第1回練習日

ロコミ、チラシによる団員勧誘により、大学生、音大生、社会人等のメンバー30人強が初顔合わせ。京都の地にフィロムジカ誕生！

1996. 10. 19(土) 第1回定期演奏会（京都府長岡京記念文化会館）

指揮：滝本秀信

メンデルスゾーン／交響曲第3番「スコットランド」 ブラームス／ハイドンの主題による変奏曲

ヴァーグナー／ニュルンベルクのマイスタージンガー第1幕への前奏曲

創団わずか半年で定期演奏会を開催。難曲のメンデルスゾーンを抱え、演奏会開催への不安が隠し切れなかった練習の日々。終演後、ある音大生団員は「こんなに“緊張”した演奏会は今までなかった」とお腹に手を…。 “聴かせる音楽”の追究が始まります。

1997. 3. 16(日) 第2回定期演奏会（京都府長岡京記念文化会館）

指揮：藏野雅彦、ギター：藤井敬吾

ブラームス／交響曲第2番 ロドリゴ／アランフェス協奏曲 芥川／交響管弦楽のための音楽

ドリーブ／バレエ組曲「 Coppélia 」よりプレリュードとマズルカ（アンコール）

初めてのコンチェルト。初めて邦人作曲家の作品演奏。京都のアマチュアオーケストラ活動推進のために尽力されている藏野先生との出会いにより、まだまだ赤ん坊だった私達が、アマチュアオーケストラの常識、教養を少しずつ身に付け出し、成長をはじめます。

1997. 11. 22(土) 第3回定期演奏会（京都府長岡京記念文化会館）

指揮：加藤完二、チェロ：河野文昭

シベリウス／交響曲第2番 エルガー／チェロ協奏曲 ラヴェル／古風なメヌエット

演奏レベルがまだまだ拙く、厳しく最後まで絞られた合奏、合奏、合奏。団員間の絆が層固くなり、特に弦のアンサンブルが強化。夢の京都コンサートホールでの演奏会に向け、大きく前進します。

1998. 4. 18(土) Spring Concert（京都こども文化会館）

指揮：高谷光信

ベートーベン／交響曲第7番 イベール／ディベルティメント

ダンツィ／木管五重奏曲 ベートーベン／交響曲第7番より第2楽章（アンコール）

団の一周期を締めくくる第4回定期演奏会を控え、アンサンブル強化を狙い開催。「これまでの指揮者人生で特に忘れられないのは、フィロムジカでのベートーベン7番のアンコールの2楽章。あの演奏はある意味はめちゃめちゃな所がたくさんあったけど、なにかが出てた！なんと言ってもあの感覚が一番良かった。（高谷先生後日談）」。皆がひとつになって創り出す…この確かな感觸を、指揮者、団員ひとりひとりが感じ取った瞬間。

1998. 11. 29(日) 第4回定期演奏会（京都コンサートホール大ホール）

指揮：藏野雅彦、ピアノ：大畑博貴、オルガン：中山幾美子

サン＝サーンス／交響曲第3番「オルガン付」 プーランク／ピアノ協奏曲

モーツァルト／歌劇《ドン・ジョヴァンニ》序曲

サン＝サーンス／歌劇「サムソンとデリラ」より「バッカナール」（アンコール）

ついに迎えたこの日。創団当時の“コンサートホールで「オルガン付」を演奏する”という夢を実現した日。

大ホールの1800席はお客様で埋め尽くされ、お客様と演奏者が一体となって共有出来た“音楽を創り出す喜び”。ホールを包んだ重厚な音。多くの先生方にご指導受けた、創団2年での成長の証。この日の感動は、我々の一生の宝物です。

1999. 6. 6(日) 第5回定期演奏会(呉竹文化センター)

指揮：池田俊

シューマン/交響曲第2番 シベリウス/カレリア組曲(間奏曲・バラード・行進曲風に)

ロッシーニ/「セビリアの理髪師」序曲 シベリウス/悲しきワルツ(アンコール)

コンミス、各パートのトップ等がほぼ入れ替わった、団の2周期最初の演奏会。“コンサートホールを満席にしたアマチュアオーケストラ”としてのお客様への責任を自覚して、さらなる音楽の向上を目指し、新たな気持ちで再スタート。1周期を終え、団のカラーが確立されつつあります。

1999. 6. 26(土) ペニンシュラ・シンフォニー・ユース・オーケストラ & 京都フィロムジカ管弦楽団合同演奏会(元春日小学校講堂)

指揮：ミCHEL・サルドゥ・クライン、高谷光信

シューマン/交響曲第2番より第4楽章 シベリウス/カレリア組曲より「行進曲風に」

ロッシーニ/「セビリアの理髪師」序曲(以上フィロムジカ)

ベートーベン/交響曲第5番より第4楽章(合同演奏)

「京都にアマチュアの音楽文化を根付かせたい」という我々の目標に共感した藏野先生からの企画主催の打診により実現。ハイスクールの生徒中心のPYOの若さあふれる音と、大学生中心の我々のちょっと大人の演奏のカラーの違いがはっきり見え、自分質の音楽の色を改めて認識した演奏会。

2000. 1. 9(土) 第6回定期演奏会(京都府長岡京記念文化会館)

指揮：高谷光信

ベートーベン/交響曲第4番 ビゼー/「カルメン」第2組曲

ヴァーグナー/楽劇「トリスタンとイゾルデ」より前奏曲と愛の死

第2回以降副指揮者を務めて下さった高谷先生を本指揮者に迎え、第8回のマーラーへの勉強のために取り組んだベートーベン。長時間のリハーサルの物語っていた、日々の密な分奏と合奏の繰り返し…こうして丁寧な音楽が生まれました。

2000. 6. 4(日) 第7回定期演奏会(京都府長岡京記念文化会館)

指揮：遠藤浩史

ショスタコービッチ/交響曲第10番 フォーレ/「マスクとベルガマスク」組曲

デッカス/魔法使いの弟子

第8回のマーラーに向け、はっきりしたモチーフのある曲で臨んだ、all 近現代音楽プログラム。最後まで通し練習がなかなかできない難解なリズムと超絶技巧の連続。集中したショスタコービッチに、終演後先生方からも「“スターリン”がみえた！」との言葉をいただき、マーラーへの確かな感触をつかみます。

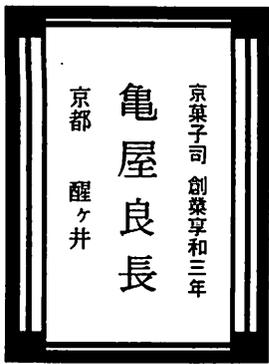
2000. 12. 10(日) 第8回定期演奏会(京都コンサートホール大ホール)

指揮：金子建志

マーラー/交響曲第5番 別宮貞雄/祝典序曲

フィロムジカ2周期締めくくりの本日。皆様にも成長したフィロムジカの色を感じていただけますように…。

(Tp. 村上明日香)



京葉子司 創業享和三年
 亀屋良長
 京都 醒ヶ井

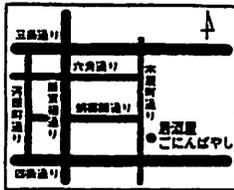
KAMEYA YOSHINAGA
 Kyoto Samegai
 since 1803



京都市左京区松ヶ崎木ノ本町8-2
 (アルプス北山1F)
 TEL(075)723-0573 FAX(075)723-0574
 ご注文を電話・FAXで承ります。
 営業時間 10時~24時
 年中無休



PM5:00~深夜12:00
 (土・祝日前~AM2:00)



4~100名 宴会受
 中・木屋町四条上ル
 ☎(075)221-3517

都ホテル・新都ホテル専属

岐陽館

小林祐史写場

(駐車場有り)

〒604-0991 京都市中京区寺町通丸太町下ル
 電話 (075) 231-1471
 FAX (075) 231-1471



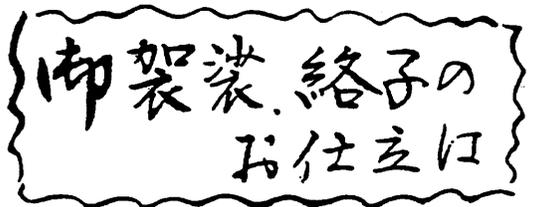
ゆったりのんびりくつろげます

湯楽荘

観光に・仕事に・学生さんの宿舎にどうぞ
 近くに市の体育館・競技場・テニスコートあり
 夏は庭で炭火バーベキューを
 楽しんでいただけます

料理
 和食中心です

亀岡市科野町柿花吉岡32 京都交通柿花バス停近く
 ☎(0771)22-1030代



京都 日吉町 吉野 隆

TEL 0771(73)0193

合宿・研修に、ぜひどうぞ!!

びわ湖 千鳥荘

滋賀県滋賀郡志賀町南浜 403
 Tel/Fax (077) 594-0035



京都府知事登録第6号

日本教育旅行

京都市下京区烏丸七条上ル一筋目東入

☎0120-040566

合宿・セミ旅行・スキー・海外旅行 etc
 お気軽にご相談ください

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeisteren

天澤 天二郎
大八木 文人

Violinen

天澤 天二郎
飯田 俊也
井上 あゆみ
井上 理恵
越後 美和
大八木 文人
萩野 衣美子
小幡 拓也
木下 知子
田村 うらら
千熊 由起子
津田 和子
津田 篤太郎
中島 円
西村 浩輔
藤本 亜美
南方 一晃
宮下 康子
吉野 仁子
吉村 良和

Violen

河上 由香里
篠崎 淳
瀬尾 倫代
竹歳 環
長谷山 智仁
平石 美緒
松浦 淳司

Violoncelle

海野 香織
小川 優香
小野田 税
菊地 涼
小松 正明

Bässe

今城 和久

Flöten

江藤 佳美
逸見 正憲
松村 朋美
(Piccolo)

Hoboen

中西 充弥

Klarinetten

武田 勝正
田中 慎一郎
野田 瑠美

Fagotte

高山 泉
田中 裕美子
廣岡 美紀

Hörner

芦原 俊平
木下 洋輔
桑野 亜紀子
坂口 裕志
(Corno obbligato)
長岡 武志
安田 聖
吉野 文彦

Trompeten

遠藤 啓輔
村上 明日香
渡辺 美智子

Posaunen

島川 英介
菅山 光城
野田 秀一郎
宮下 秀行

Tuba

坪内 大輔

Pauken

永野 貴子

顧問

和田 之宏
団長
長岡 武志
事務
伊吹 勇亮

副指揮／柴田謙

1974年4月21日、京都市生まれ。トランペットを八木茂夫、宮村聡の各氏に師事。

1995年より、指揮を佐渡裕氏に師事。オーケストラ指揮者として活躍する他、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール主催・青少年オペラシリーズ等、オペラの副指揮者としても、その活動の場を持つ。

現在、近衛室内管弦楽団常任指揮者、大阪大学交響楽団トレーナー。滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール「青少年オペラシリーズ」音楽スタッフ。

弦トレーナー／吉野美穂

京都市立芸大卒。伎芸天(Gigeiten)弦楽四重奏団を結成、関西を中心に意欲的に活動中。岸辺百百雄氏に師事。

管トレーナー／石橋耕三

東京芸術大学卒。お茶の水女子大学附属中学校講師を経て、京都市交響楽団入団、現在に至る。クラリネットを三島勝輔、千葉国夫、浜中浩一の各氏に師事。

管トレーナー／山崎雅夫

京都大学卒。京都大学交響楽団金管・打楽器トレーナー。

トランペットを、C.マクベス、A.ハーゼス、M.アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団 第9回定期演奏会

2001年6月3日(日) 京都府長岡京記念文化会館

シベリウス/タピオラ バスタ/マリナー協奏曲 ドヴォルザーク/交響曲第7番

指揮：井村誠貴

(予定)

賛助会員募集中

フィロムジカの活動に協賛して下さる方を募集しています
(特典)年2回の定期演奏会にご招待。会報にて演奏会などのご案内をします
(年会費)個人会員：4,000円/1人 Jr.会員(高校生)：2,000円/1人
廣岡/ Tel.075-682-8175

新入団員募集中

(募集パート)

ヴァイオリン, ヴィオラ, チェロ, コントラバス, オーボエ, ファゴット, トランペット, ホルン
(管楽器はオーティションあり) <スタッフ同時募集>

(活動)

毎週日曜日 午後1時~5時 河原町丸太町周辺(ここに事務局があります)

入団費 5,000円 団費 3,000円/月

社会人と学生と一緒に頑張っているオーケストラです

河上/ Tel:075-744-2158 Email:yukarikk@hkg.odn.ne.jp

フィロムジカホームページ <http://www.artdam.uji.kyoto.jp/philol/>

クラシック音楽の海外公演・国際交流

海外での公演・国際交流は、現地でのマネジメントが大切です。
弊社は日本のオーケストラの海外公演・国際交流を、真の意味で成功させて参りました。
海外公演・国際交流のお手伝いはおまかせください。

最近の海外公演実績・予定

岡山県桃太郎少年合唱団ドイツ公演98年8月(レーゲンスブルク大聖堂他)
同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演98年3月(ミュンヘン・ヘラクレスザール他)
京都市民管弦楽団ヨーロッパ公演99年5月(ウィーン・ムジークフェライン大ホール他)
ひこねベルリン第九実行委員会99年12月31日(ベルリン・SFB放送大ホール)
ルーマニア トゥルグ・ムレシュパッサ没後250年記念音楽祭 2000年5月(文化宮殿)
同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2001年3月(グラーツ・ステファニーザール 他)

ホームページ：<http://www.mitsuma.com/agent/oversea>

協力会社：ルフトハンザドイツ航空会社、全日空、JTB、近畿日本ツーリスト、AIU保険会社

(社)日本クラシック音楽事業協会会員

(株)ミツマ・ミュージックプロダクツ

〒605-0009 京都市東山区三条通大橋東入ル大橋町102 田中ビル5F Tel.075-761-1213 Fax.075-752-5568

